

# 令和4年産大豆栽培こよみ（フクユタカ A1）

## I 栽培管理上の注意点

J A 西三河

生育旺盛で倒伏しやすいので、適期播種（7月）する。裂皮粒も発生しやすい。

## II 主な作業と作業時期

月	生育	作業名	作業時期	作業内容及び使用資材 10a 当たり	備考
6 ~ 7		種子準備	6/下	種子更新を行い健全な種子を用いる クーラーMAXX(乾燥種子1kg当り8ml) または キヒゲンR-2フロアブル(乾燥種子1kg当り20ml)	草枯らしMICは播種7日前までに使用する タッチダウンiQは耕起又は播種7日以前(雑草草丈30cm以下)で使用する  畦畔沿いの明渠は30cmの深さとする  弾丸暗渠は明きよよりも浅く施工し、暗きよを通じて明きよに排水ができるようにする。
		種子消毒・アブラムシ類・フタスジヒメハムシ防除			
		種子消毒・鳥害防止	6/下	ラウンドアップマックスロード 200~500ml または 草枯らしMIC 250~500ml または タッチダウンiQ 250~500ml	
		播種前除草			
		土づくり			
		排水対策			
明きよ	7/上	前作小麦での排水溝を再度整備する 7~10m間隔で深さ25cm以上の溝を掘る 深さ20cm、施工間隔3~6m			
弾丸暗きよ施工					
7 ~ 8	播種   出芽	耕起・播種	7/中下	種子量5kg/10a、うね間50~70cm、播種深度3~4cm エコトップ乳剤 400~600ml または フルミオWDG 5~10g	フルミオWDGはイネ科雑草には効果が劣る。イネ科雑草発生した場合は、大豆出芽後にイネ科雑草に効果のある除草剤を散布する。  <b>ろう生小麦対策</b> <b>ワンサイドP乳剤</b> アサガオ発生した場合には、大豆2葉期以降開花前までに、大豆バサグラン液剤またはアタックショット乳剤をほ場全面散布
		除草剤散布(播種直後)			
		フェロモントラップ設置			
		除草剤散布		7/下 8/上	
8	開花	中耕・土寄せ	8/上中  8/下	第1本葉の節の高さくらいまで土寄せ	開花予定10日前までに  <b>摘心栽培</b> : 開花期前に主茎長が45cm以上になった場合は摘心をする。  プレオフロアブルはシロイチモジヨトウに登録(地上散布)あり。  アサガオ・ホオズキの発生が多い場合、畦間(・株間)散布を行う。  <b>ただし、子実肥大期以降は除草剤の畦間・株間散布はしない。</b>
		ハスモンヨトウ防除			
		(除草剤散布)			
9 ~ 10	莢伸長・粒肥大	カメムシ・ハスモンヨトウ防除	9/中下	○地上散布の場合: トレボン乳剤 1,000倍液 またはスタークル(メイト)液剤10 1,000倍液 キラップフロアブル 2,000倍液 (スタークル(メイト)、キラップの効果はカメムシのみ) ○無人ヘリによる散布の場合: トレボンエア 8倍液, 0.8L またはスタークル(メイト)液剤10 8倍液, 0.8L キラップフロアブル 16倍液, 0.8L (スタークル(メイト)、キラップの効果はカメムシのみ) ○地上散布の場合: ベルコートフロアブル 1,000倍液 ○無人ヘリによる散布の場合: ベルコートフロアブル 6倍液, 0.8L	開花を迎えたら、カメムシ(特にミナミアオカメムシ)の発生状況を確認・注意する。 発生状況に注意しながら、開花期から約2~3週間後、莢が形づくられた頃をメドに防除を行う。 カメムシの発生が続く場合、複数回防除を行う。 (トレボン乳剤・スタークル(メイト)液剤10、キラップフロアブルの散布(使用)回数はそれぞれ2回まで)
		紫斑病防除			
11	成熟	コンバイン収穫	11/下~	汚粒が発生しないように雑草等には十分注意する 収穫適期の目安(コンバイン) 穀粒水分: 18%以下 茎水分: 50%以下 通風コンテナを利用 大豆選別機を利用	収穫時間 10:30~16:30 フクユタカ A1 は難裂莢性ですが、刈り遅れは品質低下につながるため適期収穫を心がける。

※農薬の使用に当たってはラベルの記載に従って使用し、また農薬の飛散防止に努める。令和4年〇月〇日農薬登録情報 西三河農林水産事務所農業改良普及課作成指導

## R3年度大豆肥料試験結果（「生産体制・技術確立支援事業」）

◎西尾市内6地区12か所で試験を実施しました。

◎生育調査結果は、開花期（8月末）および子実肥大期（10月）において、主茎長、葉色ともに肥効調節型全量基肥を用いた試験区（平均8.3Nkg/10a）が慣行区を若干上回りました。

	生育調査					
	播種日	施肥量	開花期		子実肥大期	
			主茎長	葉色	主茎長	葉色
月/日	Nkg/10a	cm	SPAD	cm	SPAD	
<b>試験区（苦土石灰+肥効調節型肥料）平均</b>	7/22	8.3	44	34.7	60	50.0
<b>慣行区（苦土石灰+無施肥）平均</b>	7/22	0	41	33.6	56	48.4

◎成熟期調査結果は、主茎長、分枝数、莢数で試験区が慣行区を若干上回りました。

◎坪刈サンプル（2m×2か所）の収量調査では、試験区の方が慣行区よりも精子実重で24kg/10a、大粒率で3.5%、百粒重で0.5g上回りました。

◎調査をした12か所のうち、坪刈精子実重は8か所、大粒率は9か所で試験区の方が慣行区よりも上回りました。

	成熟期調査				収量調査(坪刈)			
	主茎長	分枝数	莢数	倒伏程度	精子実重	大粒率	屑粒重	百粒重
	cm	本/株	/m <sup>2</sup>		kg/10a	%	kg/10a	g
<b>試験区（苦土石灰+肥効調節型肥料）平均</b>	59	2.9	762	1.0	319	68.0	5.2	33.1
<b>慣行区（苦土石灰+無施肥）平均</b>	57	2.2	692	0.8	295	64.5	5.3	32.6

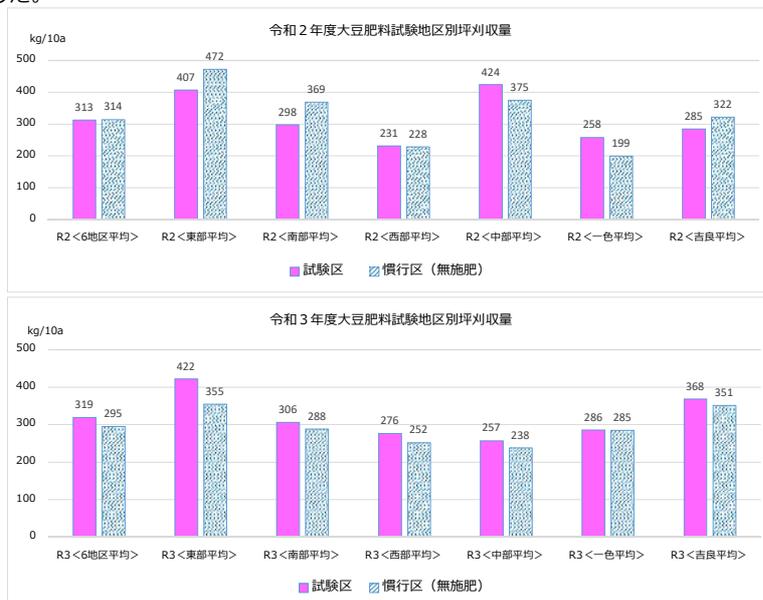
※精子実重は大粒+中粒+小粒、水分15%換算

◎コスト計算では、10aあたり全量基肥肥料25kg(N7.5kg)分の約5,000円の経費増となるが、収量が20kg/10a増加すれば、10aあたり約2,000円の利益増につながります。

(10aあたり)

経費増	5,000 円	全量基肥肥料25kg（全層施肥N7.5kg）、@4,000円/20kg
収入増	3,333 円	収量20kg/10aアップ、@10,000円/60kg
	3,610 円	経営所得安定対策（ゲタ対策）数量払い+20kg分(1等相当)
利益	1,943 円	

◎2か年の試験において、R2年度は6地区平均では収量差がほぼありませんでしたが、一色地区の平均で59kg/10a、中部地区の平均で49kg/10a試験区の方が慣行区（無施肥）よりも坪刈収量が多くなりました。R3年度は試験区の方が慣行区（無施肥）よりも坪刈収量が多い傾向となり、西部、中部、一色地区では2か年とも試験区が慣行区（無施肥）と比べて同等または上回る結果となりました。



根粒の活性は生育初期は穏やか、開花期頃に窒素固定増大、生育後半は再び鈍化します。  
大豆は開花期に窒素吸収量が高まり、子実肥大期に多量の窒素を必要とするため後半部分を肥料で補うことで安定多収が期待できます。

坪刈収量差 試験区 - 慣行区	R2 kg/10a	R3 kg/10a
6地区平均	-1	24
東部平均	-65	67
南部平均	-71	18
西部平均	3	24
中部平均	49	19
一色平均	59	1
吉良平均	-37	17